

白馬會經營譚

東京美術
學校教授 黒田清輝君

白馬會の由來

今を距る十年と言へば一昔、其年の春も暮れゆく五月さつきの或日の事、芝は聖坂のとある濁酒屋どぶろくやに、薄汚ない臺を圍んで酒樽に腰打掛けた五六人の畫家があつたと思ひ給へ。咽返る様な熱爛の濁酒の香り、可厭いやに鼻を刺激する煮物の匂ひ、人の炭酸瓦斯、湯氣なぞの濛々と立籠めた中で、彼等は顔を熱らし乍ら何をか論じ合つて居る。一人は言ふ——日本の在來の畫家の研究法は改良せねばならぬ、如何しても佛蘭西流の法に據らねば繪畫の發達は期し難いと。又一人が言ふ——それも然うだ、雖然けれど他にも困る事がある、僕等は佛蘭西から歸朝したばかりで、一向日本の畫家の事情が解らぬ。實際も出來ねば研究も出來ぬと。すると他の畫家が言ふ——それでは何か繪畫の會を立てやうではないか、吾々の目的を貫ぬくために。好からうく、では早速立てる事にしやう……

希臘風の古雅な門で、來る年毎の上野の秋を飾る白馬會の相談は、實に濁酒屋の片隅に於て論じられたのだ。惟るに白馬はシロウマである。シロウマは濁酒である。それ濁酒たるや高等なるものではなくて、極めて平民的の物。而して此處に會合するものは、決して主義などを振廻す連中では無い。談話も飾らねば氣質も真正直。そこで自分等も之に倣つて偕てこそ白馬會とは名けたので、よし會合の場所は下等な所でも、集つた者は皆氣の合つた、飾り無い人間のみであつた。

白馬會設立の動機

一體白馬會設立の抑々の動機を言ふならば、明治二十六年、自分と久米桂一郎君と二人新たに佛蘭西から歸朝した、而して當時既に組織せられて居つた日本美術會に加入して、佛蘭西から持參した製作品を陳列したりなどしたが、此時一方では美術の書生等と、或る研究所めいた物を作つて、少しく從來の研究法と異なつた方法——自分等が佛蘭西で研究したのに略ぼ類似の——をやり出すし、又一方では美術家といふ連中と交際したが、前述した通り、其交際は自分等にとつては誠に意志の疏通せぬ、冷かなもので、到底打解けて繪畫の研究を共に俱にしやうといふ機會の少いのを發見したから、謂はゞ改善の必要を感じて種々考へた末、自分等より以前に歐洲から歸朝して居る人々にも計つたりなぞしてみた。自分等は實際の繪畫界に飽足らぬ、兎に角にも少し面白いものにして居る人々にも企画であつたのだが、之は寧ろ大膽なる決心であつたので、一兩年経た後初めて事情も解り、微々たる力で天下を動かすなどは思ひも寄らぬ事を悟つた。

此上は仕方が無い。で、全く同志の者のみ寄つて一つの會を組織し、平生距てなく交際もし、研究も爲やうとの意志を發表すると、自分等が幾分か既に養成して置いた書生等も大に賛同して、終に白馬會なるものが生れたのである。

以上の次第だから、白馬會は展覽會をするのみが目的ではない。展覽會は事業の一であつて、研究の結果を集めて發表する機關、又集つた時に公衆の批評を乞ふ機關、もう一つ言へば、何程親密にして居ても、平生では會員の作物を一堂に集める機會は無いので、それをば補つて、且つは互に参考とも助けともしやうといふ譯。

だから會員も必ずしも洋畫家や彫刻師には限らぬ。要は親友同士の會合である。第一に會員と定まつた者を擧ぐれば——久米桂二郎、小代爲重、佐野昭、安藤伸太郎、山本芳翠、合田清、吉岡育、中村勝治郎、堀江純吉、今泉秀太郎、藤島武二、和田英作、岡田三郎助、小林萬吾、佐久間文吾、岩村透、長原孝太郎、及び自分の十八名であつた。第一回の展覽會を開いたのは、明治廿九年の十月であつたが、それまでには會員も稍や増した。雖然何と言つても未だ少數である。

經費上の大困難

第一の困難は矢張り金である。平生寄合ふのは容易であるが、展覽會開會に要する金、之には何時も困る。勿論美術の會などは精神的で言へば、他の大組織の實業的團體なごよりも高尚かも知れぬが、經營は些々たる物。雖然會頭、賛助員、名譽員等、立派に保護し呉れる者は皆無で、單に書生の有金を寄せ集めて爲す事業に過ぎぬ。今日に至る迄幾分か會の擴張、技術の進歩を見たのは寧ろ奇怪の至りである位。仲々理想通りに行はれた事は一回だもなく、殊に初期には經驗も無いのに非常なる設備をする金を寄せて、一回で捨てるといふのだから困難であつた。此點では今日未だ浮び上らぬのだが、幸に會員となつた人は、普通所謂何々會とは異なり、各自々己の會として中心から盡力して居る。而して少數の會員を以て、他の盛なる會に對抗せんなどの念は無いが、見苦しくせぬ様には一心に心掛けて居る所で、従て一層の勉勵を要する。併し此勉勵は吾人の非常なる慰藉であり、且つ親密を増す媒介者となるのである。

展覽會以外の事業では、昨年迄は書生を養成したが、昨年から光風といふ雑誌を發行し初めた。之また少な

らぬ熱心と費用とを要する。雜誌で收支償ふのは、商賈人ならいざ知らず、吾人の如き無經驗者では到底及ばない所。併し斯道に盡す考へを先にして損失の念は後にして居る。損失を埋める様にすれば希望の十分之二も達せぬから、物質上の損失のために尊い藝術上の希望を犠牲にしてはならぬ。のみならず珍奇な印刷法などがあれば直ぐ試みてみる。殊に日本畫を西洋畫に應用する事などは既に試みられてゐる——例へば「明星」個人としては三宅君の如き——斯る事も費用を度外視した話だ。雜誌の内容は繪畫を除く外は赤面の物であるが、たゞ心強いのは、會員が、世に有益だと思ふことは文の巧拙を顧みず發表する事である。本會創立以來既に十年。普通ならば疲勞すべき筈であるのに、益々奮勵するのは悦ばしい。之も自身の會だといふ觀念から來る事で、何か事を起す時には會には相談するが、各自の意見を發表して、其賛成者が共にやる。故に三人でも四人でも一致すれば、既に自分自身の事業として盡瘁する。會頭無き平等主義の賜物であらう。冒頭に述べた白馬會の名稱の起因からみても解る。

美術家的生活の愉快

展覽會の準備としては、會員は平生一ヶ月に大抵一回、赤坂の溜池、或は本郷の菊坂の研究所に集會する。之を牛ドン會と名けて居るが、其理由は溜池の研究所の近傍に牛肉屋があつて、牛のドンブリを作る。それを食ひつゝ會合したからである。此外には臨時に旅行をする。大抵五六人、若くは七八人で方々へ出掛けて一泊の時あり、二泊の時あり、互に言い度い放題の事を言つて遊び廻る。親友同士で旅行するほど愉快な事はない。此爲に親睦の度が一層強くなる。此他研究の爲、つまり展覽會の材料を作る爲には、夏など諸所に割據して製作をする。之が

大愉快だ。中には師弟の關係があるものがあれど、其場合には師弟も糞も無い、一視同仁、皆朋友の格で、作品は毎日、植物採集でもする様に集めては、互に存分の悪口を言ひ散らす。吾々の展覧會に從來立派な作品が割合に少くて、研究材料の方が多く、而かも圖案の類似したのが多いのは、かく合宿して作るからである。

繪の主義から行けば、白馬會は所謂新派であつて、其以外の分子は疎外する様に社會の人は思つて居る様であるが、決して然らず、之は人として氣の合ふと否との區別である。此氣の合ふといふ事は、藝術迄も同じ物をやるといふ譯では無い。或は會に加盟する當時は黒色を主とした者が、其後の自己の所信によつて、赤色を主とした物を展覧會に出さぬとも限らぬ。故に會は氣の合つた者の集合であつて、展覧會は會の一個の事業である。繪は天真といふ事を主とする。材料なぞに至つては決して問はぬ。

畫家の要訣

最後に畫家たるの要素を述べてみやうと思ふが、經驗から割出した言葉と思つて呉れては困る。那樣資格はないから單に自分の考へを話すのである――

畫といふ物は、ものゝ形を畫き現はして自己の意志を述ぶるのである。既に然りとせば畫家として當然爲すべきは天然を研究する事である。之が無くば書と毫も異なる點が無い。寧ろ書の方が好い。形が不完全ならば、文字で物を示す方が、形状で示すよりも勝れて居る。併し、此物を現はすといふ事は一の技術であつて、技術は方法である、故に其方法も大に研究しなくてはならぬ。今日では種々なる物が具はつて居る時代故、此技術といふ事も、一通り一定の規則あるかの如く感ぜられる。だから其方法だけ學んでも畫には見える。雖然之は他の物と比

較せざる時の事であつて、斯の如き繪畫は畢竟小學校生徒の作文と同じく、文は成して居ても精神は空虚である。さて方法だけは誰れにも出来るが、其上の精神を畫くのが困難、方法を充分會得しての上で精神を畫かうくとするのは最も理想的な事であるが、凡人には企及し難い。先づ凡人となつて、然る後天賦の才があれば高尚の域に進む事が出来る。自分等は先づ人間になる事を第一の務としてゐる。

『成功』九十一 明治三十九年四月